

三保松原・マツ材線虫病被害の状況

— 微害傾向を維持 —



技術情報 VOL.3-3

(調査・検証) 一般財団法人三保松原保全研究所 R7.5

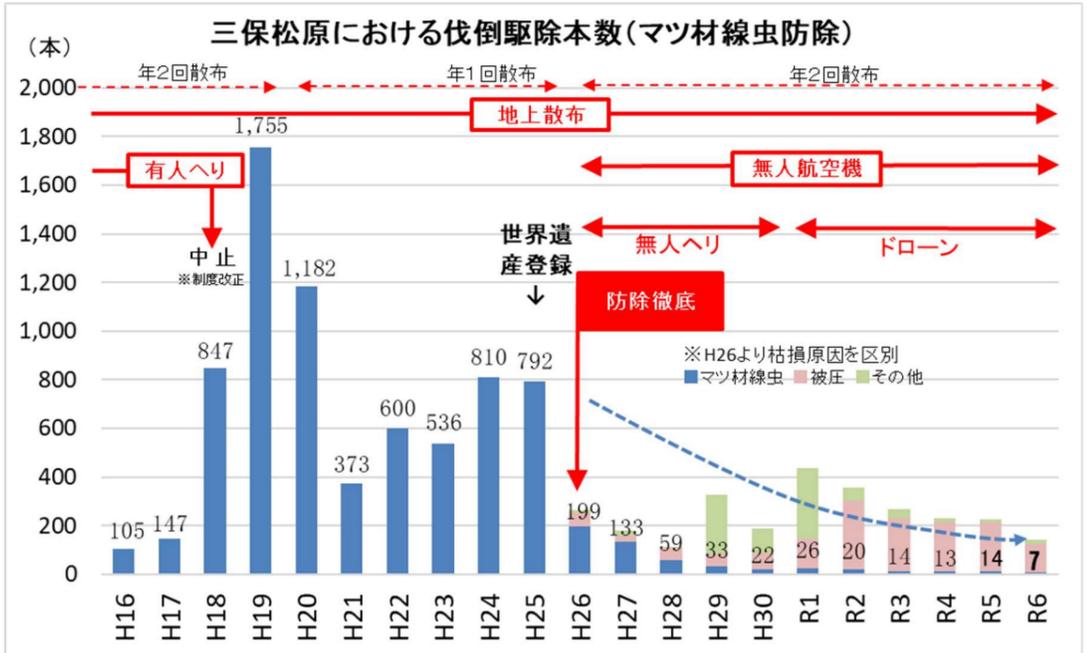
●被害の背景・推移

マツ材線虫病は、“世界4大樹木病害”に数えられるマツに激烈な被害をもたらす伝染病であり、病原体のマツノザイセンチュウと媒介者のマツノマダラカミキリにより引き起こされる。

三保松原では半世紀以上前から発生が確認されており、平成17年以前は微害を維持していたが、平成18年度に有人ヘリによる薬剤散布区域を地上散布に切り替えたことで(制度改正による)、2年間で被害木が約12倍に激増した。

その後も高止まり状態が続いていたが、平成25年度の富士山世界文化遺産構成資産の登録を契機に防除が徹底され、再び微害化している。

●被害の場所



◎近年の被害傾向

平成29年度に、防除目標値(1本/ha = 34本/年)以下を達成し、以降、維持している。

令和6年度の枯損木のうち、マツ材線虫病被害は前年度の半数の7本と、減少傾向を続けている。

被害箇所は半島北部に集中しており、被害拡大を防ぐために、特に徹底した防除が必要なエリアとなっている。



マツノマダラカミキリ

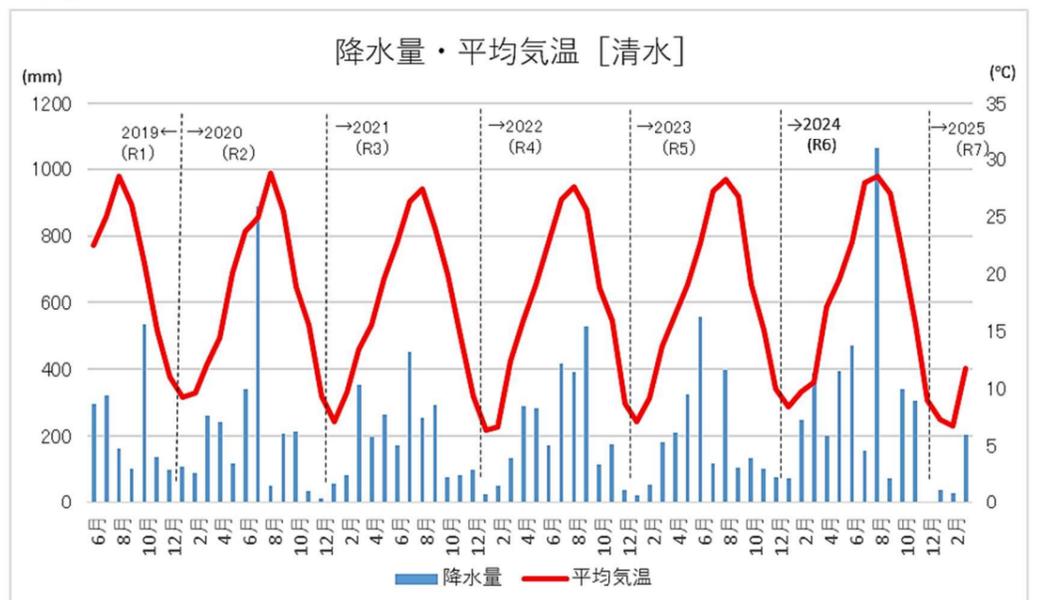


マツノザイセンチュウ

◎その他要因

令和3年度には、前年の高温少雨による水分ストレスが原因と考えられるまとまった量の枯損が発生した。

その後、年単位の降水量は平年並みから多い年が続いているものの、月別では極端に少ない月(R6.9月など)があり、気温についても、観測史上最高気温を更新する月が相次ぐなど、高温少雨による枯損のリスクが高まっている。



《参考》 県内の激害地の状況 (令和3年12月撮影)

県内の激害地を見ると、マツ材線虫病を放置した場合は、すぐに感染爆発が起こり、ほぼ3年でマツ林は壊滅状態となっている。

下の写真は防除を取り止めた場所で、感染源となった左側のマツ林から右側のマツ林に被害が連鎖・拡大し続けている。

三保松原は現在、微害化しているが、突然激害化した平成18年度の前例もある。少しの防除の緩みが大きな被害に繋がるため、今後も緊張感を維持し、徹底した防除(被害木の調査・伐倒駆除、薬剤散布等)を実施していく必要がある。



感染源となったマツ林
既に朽木が立っているだけの状態



被害が拡大しているマツ林
ほぼすべてのマツが感染していると思われる